
モンスターハンターカイザ～変態転生者の狩猟記～

元副会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターカイザ〜変態転生者の狩猟記〜

【Nコード】

N6742X

【作者名】

元副会長

【あらすじ】

世界間のバランスの為に神様に殺されてしまった青年『倉田雅人』は、神様から貰った『仮面ライダーカイザ』としての能力とピークル三台を引っさげ、モンスターの蔓延る世界へ旅立った。

しかし、転生の際の条件として抜かれた記憶が、まさかの『仮面ライダー』について『！？』

こうして、会って早々の神様にまで手を出そうとする変態による、『ハンター』としての日々が始まるのであった。

・・・もちろん記憶は戻ります。

そして持たされた力はカイザだけではないようで・・・。

3rdと2ndGを中心に、物語は進行していきます。

プロローグその1（前書き）

やっと二つ目の小説を始めました。

基本的に主人公の一人称。

たまに他のキャラ、または三人称で進行させます。

そして・・・もう一つと比べて『アレ』な描写が多いです。
あくまで比べてですので、ぶっ飛んではないですよ。

プロローグその1

キイイイイイッ!!

ドンッ!!

ゴキッ!!

「.....」

キイイイイイッ!!

ドンッ!!

ゴキッ!!

「.....」

キイイ.....

「何度もやらんでもええわ!!」

ピッ

どうしてこうなった！

さっきから何度も見せられてる『事故』の映像。

あの事故に遭っていたのはどう考えても俺だ。

そして車に見事に撥ねられた俺の末路はといえば・・・

「電柱に頭ぶつけて首折り・・・うわぁ」

あそこまでキレイにゴキツといくと、逆にすごいと思えるのは俺だけか？

いや、だって首だけ当たって折れるっておかしいだろ。

それにしても酷いよな。せつかく近所のおもちゃ屋に入荷された『フォー〇ドライバー』を買いにいこうとして、少しでも早くと近道を選択したというのに、その結果がこれだよ！！

やっぱあれか。

前日にエロゲ買って夜更かししまくってたから注意力が落ちてたんだな。

うん、そくに違いない！！

ん？『自分がどうなってるのか理解してるのかコイツ』だって？

もちろんさぁ！

俺死んだんでしょ。

だってこんなにも自分が死ぬところ見せられたらさ、嫌でも理解できちゃうわけだ。

で、真っ白な空間で大きなテレビを前にしてソファーに座ってふんぞり返ってる、そんな俺がようやく至った謎というのが、

「じじい……どじよ?」

「ようやくその疑問に至ったか……」

!?!、何者だ!?!

後ろを振り向いた俺の目には、信じられないものが映った。

こゝ、ここまで大きなモノは見たことないぞ!!

世の男ども（もちろん俺自身も）が崇める理由がわかるというもの
!!

「胸でっけえ……」

「はつきり口に出しているが」

おっといかんいかん。

つい口に出してしまったのか。

だがそんなことは置いといて、さてさて……こんな立派なモノを持つ女性は、一体どれほどのものなのか……

「……」

「?、どうした?」

「……リインフォースにイノベーターの目って」

「これはそういう名前だったのだな」

自分の目だけを指差してそう言う巨乳女性。

リインフォースは知ってるんかい！

なんだ、俺死んでなかったんだな。

夢だ夢、それしかないよもう。

だってあれだよ？某アニメのキャラが自分の目の前にいたらさ、これはもう絶対に夢だわ。

っていつか何だよ！リインフォースにイノベーターの目ってさ！

破壊と調和の融合ってか？やかましいわ！！

とにかくさっきの映像は捏造か正夢で、俺は病院のベッドの上か自室のベッドの上で眠ってるんだろう。

事故に遭ったとしても遭ってなくても、俺は生きてるはずだ！

「はあ、現実から目を逸らすのはよくないと思うのだが。それに話し合いには『この目』がぴったりだと聞いた」

その人、ああもうリインでいいや。うるさいぞ！

夢の中に出てきておいて、何が『よくないと思う』だ！

……でもホントにいい胸してるな。

内容はアレとはいえせつかくの夢だ。

これぐらいしてもいいよな？

モミモミモミ……

「んなっ！？何をする！」

モミモミモミモミ……

いや、これはいい。

実にいい！！

大きくてハリがあつて、でも柔かい！

幸せだなあ、夢とはいえこんな美人の胸を揉めるなんてさ。

リンっぽい人も最初こそビックリしてたけど、だんだん身を擦じらせてきて……堪らん！

「いつ、いつまで、あつ……続けっ、る、んっ！！」

ううん、そりゃもちろん夢から覚めるまででしょう？
でも覚めて欲しくないなあ。

このままずっと続いてくれたら最高だね。
ついでだから服の下から……

「アツ……ま、まてっ！」

遅い！

すでに侵入後さ！

胸のあれまであと少し……

「いい加減に……んっ……しろっ！！」

「ヒデブツッ!」

ドンッ!

・・・つてえ。

く、首が異様に痛い。

夢の中とはいえ、何度も折られてたまるか!
・・・??

『何度も?』

なーんか妙な違和感を感じるんだが。

何故かおかしなほどに、『このこと』を否定したらいけない気がする。

それになんだこの記憶・・・。

第三者視点だけの映像を見てただけなのに、なんで俺自身の視点からの記憶がある!?

いや、今更不思議がることもないか。

なんせ自分で一回その結論に至ってるわけだし。

ああ・・・今度こそ大体わかった。

俺、『倉田雅人』（大学三年生）は

「死んだんだな」

「こ、ここまでくるのに時間がかかり過ぎだ!」

そんなに怒らないでくれよ。

ていうか顔が真っ赤だし、表情も緩んでるから意味ないぞ。

「ねえ？神様？」

「・・・随分あっさりしているのだな」

「そりゃ、死んだら次に会うって言ったら閻魔大王か神様でしょ。

そして閻魔様は映姫様しか認めんからな！」

「だから私は神と・・・確かに間違っではないいな」

やっぱり神様なんだ。

で、ここに神様がいるってことはさ、あれでしょ？

俺には第二の人生が待ってるんじゃない！？

「流石に察しがいい。その通りだ」

なんだよこの神様、心読めるんじゃないか。

そいうやさつきから言ってもないことに反応してたっけ。

なのにさつき俺の『挨拶』を回避しなかったってことは、この人淫ら・・・

「それ以上考えたら地獄に送り込んでやるからな」

「すいませんでした」

で、神様も暇じゃないんでしょ？

さっさと本題に入ったらどうです？

「ぬう・・・仕方ないな。ハッキリ言おう。お前には別の世界に転生してもらいたい」

「それは、あんたのミスで俺が死んだからかな？」

もしそうだったらたっぷり特典をもらっさ。

「残念ながら違うな。しかし、私が殺したことに変わりないか」

「はい？それってどういう・・・あんたまさか!？」

目の前の神様は表情を消して頷いた。

つまり、俺の考える中で一番酷いやつみたい。

「そつだ。お前は私が・・・『ワザと』殺した」

「ふっざけるなよ!？押し倒してやるうか!！」

「そ、それはよせ!！」

あ、顔真っ赤。

やめろって、もっと押し倒したくなるじゃないk、違う!!!

「説明は、もちろんしてもらえるんでしょうね」

「ああ」

十数分後

俺が神様から聞いたところによると・・・

・複数の世界と俺の世界とのバランスが崩れた。
デイ○イドじゃないんだから……。

・どうやら俺の世界のが最も強くなっているようで、バランスを取るためにはこちらから数人、特殊な能力を付けて別の世界に送り込む必要があるらしい。

・いろんな世界に人間を送らなければいけないが、その分それぞれの世界に送り込むのは一人でいいらしい。多分世界が多すぎるのだろつ。

能力付きの人間を分ければ、こちらは数が減り、あちら側は『力』の有る者が入って均衡が保てるわけだ。

・で、厳正なるクジ引きの結果、俺がその中の一人に選ばれた……
・と

「うん、やっぱり押し倒そう」

バタツ！

「ま、待て！落ち着いて話しを！」

「アホか！なんだよ厳正なるクジ引きって！なめてんのか！！」

「いやっ！だから特殊な能力を、やっ！そこはダメだ！！」

「勝手に殺されて、能力程度で満足するか！謝罪するならその体よこせ……！」

ホント何なんだよ！

そして俺はこんなところでなにやってんだか。

・・・自分で言うのもなんだが、先が思いやられる。

とりあえず、この神様の反応でもみて楽しもうか。

ブログその1（後書き）

とりあえず今回の反響を見てみます。

今回は一週間以内に投稿しますよ。

ブログその2（前書き）

私的にお馴染みの方たちから感想を頂けたので、ブログその2、投稿します。

これから先の投稿は・・・不定期で、どうかな？

へたに決めるとどっちも潰れそうで今はちょっと怖いです。

それではレッツゴー！

プロローグその2

押し倒してから数十分後

とつても可愛がってあげました。

Bまでよ？

でもかなりやらしい事になっております。

「ハア、ハア、ハア……や、やっと諦めたか」

「いんや、能力貰ったら続きな」

だから体制はこのまま。

パツと見は馬乗りだけど、痛くないように膝立ちで耐えてる。

「優しいのかそうでないのかわからん奴だ」

「素直に親切を受け取らない神様には……」

そう言ってゆつくり手を伸ばしていく。

神様も焦ったみたいで、何度も首を縦に振る。

これもまたいい!!

で、俺の能力か……。

んなもんやっぱりさ、アレしかないでしょ！

「仮面ライダーだな!!」

「そ、それは流石に程度が・・・すまない、続けてくれ」

手をわきわきさせて、俺は友人から『悪魔の笑み』と呼ばれるほどの笑みを浮かべると、文句を言おうとした神様も引き下がった。ここから俺のターン！

どうせ心が読めるなら、声に出さなくてもいいだろ。

まずはどのライダーか・・・だな。

俺としては、しっかりとした性能を持った奴がいい。かといって、無駄にチートなライダーもよくない。

RXとかクウガとかディケイドとかな!!・・・あ、文字伏せ損ねた。

誰も気にせんだろうからいいか。

でも、あえてチートで『俺TUEE!!』でも楽しいんだよなあ・・・
・三人とも大好きだし。

とりあえず、昭和はなしか？

スーパー1やZXみたいなメンテ必要なやつは使い辛いし、ストロングーなんて選んだら最後、絶対に手袋外せないよ!!

よく考えたら改造人間だから、転生に向いてなさすぎる。

その世界に改造する技術がなかったら意味ないよね！

そうするとRXも昭和縛りでだめか・・・。

とにかく、平成のライダー軍団の中から誰か選ぶしかない。

数多過ぎるけどね！

第一に、響鬼系は却下。

いちいち服が燃えてたら、その世界のムシヨ行き決定だ。

ダブルは無理。

変身するのは俺一人で十分だ！

絶対にそのほうがいい。

でもジョーカー、アクセル、スカル、エターナルは可。

龍騎系は、どうかなあ……。

モンスターの餌が……ねえ？

クウガ、ブレイドはリスクがでかい。

カリスになるには人捨てるしかないし、他も融合係数高いと、強いけど人外決定だしな。

クウガも同じだ。

ついでに言っと、オーズもそう。

俺欲望を押さえる自信ないぞ。アッチ方面だけど。

そうなると、アギト、ファイズ、カプト、電王、キバ、デイケイドか。

アギトでG3-X以外を選んだら前世の記憶が危ういし、ファイズは死ぬかもしれん。

カプトは強いだろうなあ……まさに『つい〇これる〇ら〇』だろ。

『いろいろ』できそうだが……堂々と襲う俺のポリシーに反する！

電王とキバ選んだら、もちろんあの連中が付いて来るだろ。

そうだったら、夜の行動も丸分かりじゃないか！
プライバシーは大事よ！

ディケイド、これが一番無難か？

ん？神様が首横に振ってる。

あ、そうか。

バランス取りの為に送り込んでいて、最終的に俺がぶっ壊したら意味ないのか。

ならどうすれば・・・はっ！

そついや一月ちょっと前って『カイザの日』だったよな・・・。

その時、俺の体に稲妻走る

これだ！！

体は記号だけ埋め込んで、さらに『草加雅人』ならぬ『倉田雅人』なら大丈夫。『状態にしてもらえればいい！』
名前も同じだし。

そしてもちろん俺専用で！！

あん？だったら他のライダーでもそつという処置してもらえばいいって？

ダメだ！俺はカイザに運命を感じたんだからもう反論は許さん！！

・・・やばいRX引きずってるわ。

でもいくら草加仕様になっても、結局は変身し続けたら死んじゃうよな。

ここは神様に O N E G A I すれば大丈夫っと。

あ、そんなに期待した目しないでいいから・・・期待してるのか!?

ま、まあそれは置いといて、ビールは三つとも欲しい。

それぞれいいところがあって好きだ!!

とりあえずこんなところか。

神様も『仕方ない』と言った表情で頷いてるし、これで決定だ。

「でも転生するわけだから、さすがにここでは受け取れないか」

「そうだ。その世界で手に入れるしかないが、確実にお前のもとに届くようにしよう」

なら心配ない。

あ、そつえば肝心な事聞いてなかった。

「俺の転生先つてさ、俺が知ってる世界？」

「もちろんそうなのだが・・・な」

まだなんかあるのかい・・・。

続きをどーぞ。

「お前の知っている世界のどれに飛ばされるかは・・・私にもわからひゃんッ！」

さすがにこれは揉まれても文句言えないわ。

もしマ○ラ○とかに飛ばされたらどうすんの!

バジン、バツシャー、スライガーだけじゃ死ぬだろ！！

もうこのまま頂いちゃおうか？

俺初めてだから勝手がわからんけど。

「わ、私も初めてだ・・・あつ、だからやるなら優しく・・・」

ダメだこの神様。

マジで淫乱神だった。

あんたが真似たリインフォースのイメージが崩れ去るよ。

この人は放っておいて、転生先でよろしくやろう。

いや、寂しそうな顔してもだめだからね。

もしあつちで出てきたら今度こそおそ・・・いや、神の座から引きずり降ろされるほどのこととしてやる！

お、流石にこたえたみたい。

これで神様の性的な介入は回避。

そうになると、もうここにも用はない。

「さて、そろそろ第二の人生開始とでもこうかね」

「うう・・・気を付けてな」

「だからそんな顔しても・・・かなりヤバいけどダメだから」

俺の言葉に神様は今度こそ諦めたようで、何も無い空間に指を走ら

せる。

すると、彼女の指の軌道に合わせたアーチが現れた。だが、アーチの向こう側は眩しいくらい光のせいで見る事ができない。

神様は自分の作ったアーチを見て満足げに頷くと、また何かを思い出したようにこちらを向いた。
まだなにかあんのか!?

「あー、言いづらいことなんだが・・・」

「わかった。どうしても引き摺り下ろされたいみたいだな。協力してやるよ」

「ち、違う！転生にあたっての、こちらからの条件だ」

いや、ディケイド選択不可は十分酷いだろ。
あれになれたら一気に・・・多分オーズ（フォーゼもあるかも）までのライダーに変身できただろうにさ。

「その条件というのが、んっ！だから話をつ！」
知るか！

さあさあ早く言いなさいよ。
手は止めるからぞ。

「ハア、ハア・・・条件は、転生時にお前の記憶の中から、ある記憶を消させてもらう」

「そいつは、『俺自身』のことも入るのか？」

もしそうだったら冗談じゃない。
転生しても前の自分のことを覚えてないってことは、ただ無駄な知識がある、本人としても気持ちの悪い人間になる。

「いや、自身のことは対象に入らない。お前の考える『無駄な知識』の中のどれかだ」

「それに、なにかしらのきっかけがあればその記憶も戻ってくる」

ふーん、なら大丈夫か。

んじゃ今度こそ行こうかね。

「サンキュー神様。なかなかいいもの頂いたよ」

もちろんその胸も含めてな！

「あ、ああ。喜んでもらえたならいいんだ」

それを聞いた俺は、門矢士みたいに手を振りながら、アーチに向かって歩きだす。

さあ、第二の人生のスタートだ！

向こうではあくまで紳士として過ごす。女の子に逃げられたら悲しいじゃない？

んじゃま、レッツゴーー！！

俺はアーチの向こう側に踏み出した。

神様 Side

ふう、ようやく行ったか。

あそこまで私に馴れ馴れしいやつは初めてだ。

そ、それに私に手を出してきたのもあいつが初めてだな。

そんな奴には、ちょっとしたサーブスをしてやらんと。

いや、お礼などを期待しているわけではないぞ!?

本当だ!

「一つでは戦い辛いだろうし、どうせなら『三つ』とも送りつけてやるわ!」

私は目の前に『五つ』のケースを呼び出すと、その中の三つを手元に寄せ、中身を確認してから少し手を加え、あいつの後を追わせる。

然るべき時に届くであろう。

『三台のバイク』も、同じように手を加えてから送った。

あ、負担は皆無にしたが『専用』のほうは忘れていた!

バイクのほうには仕込んだが、肝心のベルトが……。

まあオルフェノクの記号など、持っているとしても数少ないだろうから問題はないか。

そして、残りの2つのベルトはいらん。

『天』は今ここで処分だ。だが『地』まで処分するのは、少し勿体ない気がする。

他の世界……仮面ライダーと言えば、『モノリス』のところにでも送ればいいだろう。

ちょうど介入しようとした世界があつたはずだ。

『馬鹿を止めようにもライダーが足りぬ』と言っておったしから、『馬男』にでも渡せばよい。

それにしても、あいつは一体どんな世界に行ったのやら。ついでに抜いた記憶も確かめておこう。

私は空間から一冊の本と、一つのフラスコを取り出した。

本があいつが行った世界について。

フラスコの中身が、抜けたあいつの記憶だ。どんな記憶かを示すシールが貼ってあるぞ。

「世界は……モンスターハンター、3rdが中心、と」

括弧に『2ndGもあるよ』と書いてあるが、特に気にすることではないか。

さて、次は記憶を確認……!?

ま、マズい！

次にあいつに会ったら、絶対に描写できないことをされる！
それもまたいいかもしれんが……ってそんな場合ではない！

い、一番消すべきではないものが抜けるとは。

私の持つフラスコに貼られたシールには、こう書かれていた。

「か、仮面……ライダー」

プロローグその2（後書き）

何気にリリブレとリンクしてました。

タイミングとしてはライダー大戦の少し前ですね。

でもそれぞれの世界で時間の流れはバラバラなので、この先何が起ころうとも驚かないでくださいな。

いつそ剣崎の次の世界モンハンにしようか・・・。
でもそれじゃ被るから決めれないんだよね。

第一話『どんな世界かわかんが、やることは一つ』(前書き)

今回は短め。

そして転生つと。

これから彼の『ハンター人生』が始まりますw

そして転生後、彼は早速・・・w

今回からは少し抑え目に。

まだまだ子供ですからw

それでは、クエストスタート！

第一話『どんな世界かわからんが、やることは一つ』

「オギヤアオギヤア！！（瞼が開かん！！）」

異世界での俺の第一声がこれだった。

何？まともに喋れてない？当然だろ！産まれたばっかなんだから！そんな俺をよそに、男性の歓声が聞こえてくる。

「サラ、この子が俺達の子供なんだな！ほーれ、俺が父さんだー！！」

ぬっ！

この抱っこされている感覚・・・嫌いじゃないわ！！父親は抱っこが上手か。

「もう、あなた！この子が嫌がって・・・喜んでるみたいね。ならいいの」

今のが母親の声なんだな。綺麗でよく通る声してるよ。

まだ顔は見えないが、俺の新しい両親に対する第一印象は、『優しい』だった。

なるべく迷惑をかけないようにしたいもんだ。

数日後

はい！

ようやく視界やその他もろもろがはっきりして、新しい我が家で母上と二人っきりのマサトですよ！

・・・と言っても目が見えるようになったの、生まれてから一時間ぐらいだったけど。

でもビックリしたよ。

転生先でも同じ名前とは。

俺の新しい名前は、

『マサト・リシエヴィ』

正直考えるだけで嘔みそうだ。

んで、俺の父上の名前が『カズヤ・リシエヴィ』で、母上が『サラ・リシエヴィ』。

どうやら、父上が母上の家に婿養子として迎えられたようだ。

だって、何度か訪ねてきた4人の祖父母の片方が、洋風な名前で姓がリシエヴィ。

もう片方が和風な名前で姓がムラカミだったからな。

でも、家族皆が仲良しなのは嬉しいよ。

俺がいるからってわけでも無さそうだから、遠慮なくどちらにも甘

えるさ！

家族の紹介はこれぐらいにして、現在の俺はと言つと……。

「んっ、マサトは中々……おませなのね」

母上のおっぱいを堪能中ですよ

いきなり何やってんだって？

いやいや、ただのお食事ですよ。

無い歯と非力な手を使って、母上にサービスサービスウー！！

いや、全然非力じゃないんだけどね。

絶対に赤ん坊がだせる力じゃない。

ちなみに父上は仕事なんだって。

俺は起きてる時に部屋から出たことないから、父上がどんなことやってるか分からないんだけど、あの人結構マッチョだから、その肉体を生かした仕事をしているのだろう。

マッチョでिकास父上と、超が付く程の美人で出るところ（特に上）がしっかり出てる母上。

と言つことは、俺も将来は『誰このイケメン！？』と言われるレベルになるに違いない！

いや、オカマに目をつけられたいわけじゃないよ。

………？

『誰このイケメン！？』って、何の誰が言ったセリフだっけ？

そういえば産まれた時も、抱っこされて『嫌いじゃないわ！』って思ったけど、やっぱり誰のセリフか覚えてない。

多分同一人物だろうけどさ、そこから先に思考が繋がらないというか、例えて言うならこの先が崖になってて進めないんだけど。

不思議だ。

まあ、わからないならしょうがない。

またいつかにしよう。

とにかく、今は母上のおっぱいを堪能させていただきますよ。

「サラ！マサト！今帰ったぞ！！」

おっ！父上が帰ってきた！！

抱っこプリーズ父上！

恥？んなもん下の世話の時以外は感じんわ！

その代わり、その時感じる度合いが半端ないけどな。

それに、俺前世の両親は早くに死んじゃったから、素直に喜べるんだよ。

死んだのは小学生の時で、そつからは孤児院で少しだけ過ごして、高校入学を機に一人暮らしを始めた。

だから・・・自分で言うのもなんだけどさ、愛情に飢えてんのな。もう二十歳越えてるのにさ、変な奴だろ？

『いや、それよりもお前の変態度の方が気になる』・・・うーん、言い返せないな。

でも今の両親も好きだけど、前の両親が忘れられない。

だから本当なら『父さん母さん』って呼ぶのに、どうしても『父上母上』になる。

まだ喋れないけど。

二人とも、ごめんなさい。

でも、これからゆっくり直していから、待っていてくれ。

お食事と同じく俺のお楽しみのお父上抱っこが終わり、次はお風呂・・・
・なんていくわけなく、体を温かいタオルで吹かれる俺。
確かにタオルなんだけど、皆の服や俺の部屋の内装を見るかぎり日本じゃないのは確か・・・なのか？

だって皆日本語喋ってるからさ、この世界の文字を見ないとさっぱりわからん。

そう思って動かない首の変わりに目だけを限界まで動かすと、あった。

・・・読めん。

何て言ったらいい？

現代風楔形文字？
意味は理解不能だ！

父方の家はムラカミだが、どうやら地球かどうか怪しいぞ。

だが昨日確認した限りだと月はあったし、皆も月って言ってたから
断言はできない。

やっぱり地球なのかな？。

でも俺の常識が通用しない世界なんだろうなあ。

とにかくだ。文字は1から覚えていこう。

それにしても、気になることがある。

この世界のことではない。

だってそれはその内わかるだろうし、百パーセントマラ ー では無
いだろうから心配いらぬ。

俺が気になること、それは世界でも、女の子のレベルの高さでも、
母上のスリーサイズでもない。

記憶だ

あの淫乱神の言う通りなら、俺から何かの記憶が抜けているはずだ。
現に大きな損失感があって気持ちが悪い。

家族ではない。両親は間違いなく死んでしまったし、俺は一人っ子だった。

友達や知り合いでもない。

学校のことでもない。

そもそももちろん彼女のことでもない。

だってそんなものいなかったんだからしょうがないだろ!!

うーん、なんだろう？

主な記憶が抜けている様子が無い。

でも損失感はかなりでかい。

俺にとって、その記憶は余程大事だったのかな？

・・・考えてもしょうがないか。

今は母上の胸を堪能しよう。

おっ！窓の向こうに流れ星！

かわいい女の子に会えますように！

かわいい女の子に会えますように！

かわいい女の子に会えますように……眠し。

あれ？そういえば俺様から何貰ったんだっけ？

意識が保てるギリギリのレベルだと、考えることもできんな。

とりあえずモミモミ……お休みなさい父上、母上。

こうして赤ん坊な俺の日々はさつさと終わり、いつきなりの五年の年月が過ぎることになる。

もうその頃はすでにこの世界についてある程度学んでいた俺だったが、相変わらず抜けた記憶の正体が解らないままの生活を送っていた。

だがそんなある日、俺の人生にとある事件が起こることになる。

転機……とまではいかないが、大事なことだったんだ。

あれはこの世界での、俺の頼りになる相棒達との、ちょっとした出会
いだったりする。

第一話『どんな世界かわかんが、やることは一つ』(後書き)

次回は五年後、あの三台が登場。

でも記憶は全然戻らない・・・と。

年月はどんどん飛びます。

少しでも早く変身を!!

第二話『俺のハンター生活が・・・？なんだコイツ等』（前書き）

三台のビークルとの出会いの回

今回から、マサトのハンターとしての生活が始まります。
と言ってもまだ五歳w

今回はエロなし。

説明とバイクイイベント。

それでは、クエストスタート

第二話『俺のハンター生活が・・・？なんだコイツ等』

Hello!マサトだ!!

あれからいろいろあって、やっとこさ五歳になりました。
いやー、さすがに二回も繰り返すとちょっとつまらなかつたけど、
それでもこの世界の情報を得るにはちょうどいい期間だった。

俺が来た世界・・・なんとそれは、

モンスターハンターの世界だったのだ!!

・・・画面の前の皆さん？反応が薄すぎやしませんか？
え、ああ、俺がアーチの向こうに消えてからの事を知ってるわけね。

それじゃあ、俺の記憶に関して何か知ってるんじゃない？
あ、それは知らないのか。
ちよっと残念。

とにかく！

父上や母上の話を聞いていると、バリバリ聞き覚えのある村とか生物の名前が出てきたんだよ。

最初は二人がモンハンにはまってるだけとか思ってたけど、自室を出て父上のお見送りをする時にあらビックリ！

父上がかっこいい鎧つけて、さらには大剣持って、イカシた笑顔で俺を抱っこしてくれたわけよ。

しかも、かなり見覚えのあるやつを装備してた。

でも、抱っこはいいんだけどさ、腕の防具が刺々しいから中々痛かった。

父上に思いつき手を振って見送ってから、母上に父上の職業を尋ねたら、案の定ハンターでしたよ。

それで世界については納得したんだけど、母上の話を聞いているうちに、結構衝撃的な話が。

なんと父上はG級ハンターで、しかも俺達が住んでるのはかのユクモ村の隣の『ミナモ村』と言うらしい。

今のやつ、解る人にはわかると思うけど、ちょっと不思議なんだよ。

だってユクモ村は上級までしかクエストが無いはずだし、しかも父上の装備はリオソウル（ランクを考えるとZ）シリーズだった。

あり得ない話なんだ。

だって3rdにレウス亜種は出てこないんだからな。

でも父上の出身を聞いたら納得した。

あの人、ポツケ村の出身なんだって。

それならわかる。

持ってた大剣が『召雷剣』だったのも、あそこにはキリンがいて、尚且つ父上の防具が雷に強いソウルZだからだろう。

そしてハンターの総数の1割程度しかないG級ハンターの父上は、名指しの依頼が多いらしく、危険ではあるけどお金に困る事は無いそう。

父の偉大さを知った俺だったが、でもそれだけじゃなかった。

まさか母上までハンターだったとは……。

母上はここミナモ村の出身だったから上級ハンターだったんだけど、それでもここら辺屈指の実力者だったらしい。

それで、ユクモのギルドマスターに呼ばれてきていた父上と一緒にクエストに行った時に・・・と言うことだ。

「双方一目惚れってさ・・・羨ましいよ」

「マサト、何か言った？」

「な、なんでもありませんよ母上！」

え？お前喋れたのって？五歳だから当然さ！

それに言語は日本語だから、元大学生の俺に死角はない！

話をもどすよ。

電撃結婚に当たって、ポツケかミナモのどっちに住むかの話し合いになると、父上がすぐに『ミナモで暮らそう』って言ったんだと。

G級ハンターがいれば不測の事態にも対応できるから、文句無しで決定した。

でもポツケからの要請もあるから、そのときは里帰りとして家族で行く。

さすがに最初、俺はこっちの祖父母の家で留守番してたんだけど、三歳の頃から一緒に行くようになったんだ。

ポツケ村ね・・・寒い！！流石近くに雪山があるだけあって、すごいガタガタしてたって二人が言ってた。

そんな俺を見て、父上がちっちゃなマフモフ装備を特別に作ってく

れた。

初めてのモンハン装備でさ、俺泣きながらお礼言ったよ。

そしたら父上も母上も嬉しそうで、その後雪山に連れていってくれた。また嬉し泣きした。

でも、雪山でギアノスが突然襲いかかってきて、それを父上が狩ったときはちょっとね……。

今度はマジ泣きして、慰められながら帰ったよ。

でも俺も将来はハンターになりたいって思ったから、祖父母の家につくまでには意地で泣き止んで、『頑張ってハンターになる!』って言った。

そしたら祖父母も含めた四人が号泣するぐらい喜んでくれて、ちょっと気恥ずかしかったけど嬉しかった。

でもまだ早いから、六歳から少しずつ訓練を初めて、八歳からユクモの教官のところで見っちり鍛えてもらおうって言う話だった。つまり六〜八までの間、両親のもとでの訓練……死ぬかもしれんな。

な〜んてことを考えてたら、一年経って六歳になってしまった(笑)
……マジかよ。

「それじゃあ母上、行ってきます」

「はい、暗くなる前にちゃんと戻ってくるのよ？」

「もちろん。わかってますって」

六歳になった俺は、ユクモ及びミナモ村に最も近いエリア『溪流』に、『特産キノコ』と『特産タケノコ』を取りに出かけた。

これは一週間に一度必ずやることで、ポイントを変えつつ、ハンターとしての動き方と、いかにしてモンスターを避けるかの訓練だ。

もう五回目になる。

一回目は母上と一緒に、二回目からは一人でやったんだけど、ジャギイのやつらに囲まれかけて死ぬかと思った。でも通りすがりのハンターさん？（俺見てないんだよ）が、ジャギイを蜂の巣にして助けてくれたみたいだ。

散弾1v3ぐらいじゃないかと思うから、母上が助けてくれたんじゃないかと思ってるんだけど（因みにヘビィボウガン使いだ）、ホントに知らないみたいなんだよな。

誰だったんだろう？

それから二回は何もなく無事に採集できたから・・・といっても油断は禁物。

三回目から作ってもらったミニユクモ装備（オトモを二回り大きくした感じ）を身に着け、いざ溪流へレッツゴー!!!

「……………」

「『『ギヤウウウウ』』』」

「どうしてこうなった」

囲まれました。

四匹です。しかもジャギイノスも一匹サービスされたようです。

って要らねえよそんなサービス！！

とにかく、

「俺は逃げる！！」

どこもかつこ悪くない！

これは戦略的撤退だ！！

幸いキノコ、タケノコは確保済みだから、なんとかしてベースキャンプまでに奴らを撒かないと！

あん？

……増えてね？

エリアを移動することになんか付いて来るやつ増えて・・・ああ当然か。

そのエリアにいる奴も追加されるから、雪だるま式になるんだね。

「父上、母上・・・死ぬかもしれません」

え、ええいつ！

なに弱気な事を言っているんだ！

もうエリア2だ。

ここを真つすぐ行けば・・・

ドンッ！！

「ガハッ！！」

なっ！

こいつどっからきやがった！？

突如現れた一匹のジャギイの突進で横に吹っ飛ばされる俺。

危うく崖から真つ逆さまに落ちるところだったが、滑りながらも四肢で踏ん張って耐える。

顔を上げてみれば、例のジャギイの後ろには穴が・・・。

そうか！

ドスジャギイが移動に使うあの穴を利用しやがった！！

やばいぞ。

後ろは崖だし前にはジャギイの大群。

逃げ道がねえ。

しかしにじり寄ってくるジャギイに合わせて、俺も足を引いてしまった。

カランッ

「やばっ！ウツ！！」

ぬ、抜かった！

つい後ろを振り向いたから、その隙を突かれ・・・た。

ガラガラガラガラ・・・

さて、俺はさっそく二度目の死を迎えたんだな。
神様になんて言おうか。

この体じゃ押し倒しもできんぞ。

にしても身動きができないプラス謎の風圧があつて、なんとも微妙な気分だ。

・・・ん？

死んだのにまだ体が痛いぞ。

それになんだ、俺は抱えられてるのか？

とにかく目を空けないと。

「んっ・・・」は

俺が目を空けると、そこには・・・

『ピロロ』

変なのがいきました。

なにこれ、ロボット！？

銀色のボディーにかっこいいヘッド！

ロマンくすぐるいいデザインだ。

この世界にこんなものいたなんて初めて聞いたぞ！！

それにさっきから感じる浮遊感・・・飛んでんのかコイツ。

す、スツゲーな！

元の世界でもこんなのないなかったのに、モンハンの世界にいるなんて……。

「なあ、お前なんていう名前なんだ」

『ピロロピロロ』

「ごめん……さっぱりわからん」

『ピロロ……』

あ、ハッキリと落ち込んでるのがわかる。
すごい悪い事した気分だ……。

そんなこんなしていると、そいつはベースキャンプに着地した。
そこには俺を驚愕させるには十分すぎるほどのモノが待っていた。

「あゝ、バイク？」

サイドカー付の黒いバイクと、なんかすごいサイズの……バイク？

どっちもかつこよすぎて堪らん！！

でもこれで不自然さがさらに増したぞ。

俺が降りると同時に、二台とも俺の横まで移動してきたし、ロボットもすぐ横に待機したままだ。

こいつ一体だけならまだしも、明らかなオーバーテクノロジーの賜物が他にも二台。

これは臭うぜ！！

でもちょっとだけならいいよな？

何って、そりゃこのバイクに乗るんだよ。

もちろんサイドカー付の方。

前世ではちゃんと大型二輪の免許も持ってたから大丈夫！

「よっこらしょっと」

足が全然届かなかったんだけど、ロボットが抱えて乗っけてくれた。
お礼を言ったら、なんか喜んでるみたいだったな。

ブオオオン・・・ブオオオオン

おろ？

こいつも喜んでるのかな？

あ！

でっかいのが乗って欲しそうにこちらを見ている！

ならあつちにも・・・グッ！

「あ、頭が・・・痛い！」

なんだ、こいつらを見るとどんどん頭が痛くなってくる・・・。

また意識が・・・ガクッ。

第二話『俺のハンター生活が・・・？なんだコイツ等』（後書き）

やけに人間臭い三台。

でも相棒にするならこれぐらいした方がいいと思うのは自分だけ？

こんだけあっても記憶は戻らず。

琴線には触れたけど、記憶のキーはあれではないようで。

次回はとある『アタツシユケース』との邂逅・・・ちよつとだけw

第三話『容易く記憶が戻ると思ったら、大間違いだぞ!』（前書き）

ということとで第三話。

サブタイトルの通り戻りません。

詳しくは店頭（話の中）で！

それでは、クエストスタート！

第三話 『容易く記憶が戻ると思ったら、大間違いだぞ!』

「……い……サト!……ろ!」

「んん……ああ」

「」マサト!」

うおお!ビックリしたあ。

あれ?父上と母上?

それに……は……

「僕の部屋?」

は、はい。マサトだ。

今俺は、何故か自室で両親に抱き着かれてるんだけど、一体何が・
・。

あ！

溪流で崖から落とされて、その後変なロボットに出会って、二台のバイクを見つけて。

そしたら何故か頭が痛くなって、結局意識をなくしたんだった。

「あのロボ・・・ハンターさんは？」

この世界の人からすれば、あいつは確実にゴツイ鎧をつけたハンター・・・だよな？
ならここで変なことは言わない方がいい。

「ああ、あの人か！彼ならお前を抱えて村まで連れてきてくれて、俺に出会うとお前をこちらに渡してすぐにどこかへ行ってしまったぞ」

「そう・・・しっかりとお礼言えなかったなあ」

バイクに乗せてもらう時に手伝ってくれて、その時のお礼しか言えなかった。

二回も助けてくれたんだな、あいつ。

もう一回会いたいけど、普段どこにいるかわかんないぞ？

「全くお前は！なんでしつかり逃げなかったんだ！！」

「どうせ逃げ切れずに囲まれたんだろ！！」

「まだまだ訓練が足りん！！」

う、うう・・・なんですぐに父上の部屋でお説教なんだ。
もうかれこれ一時間ぐらいだぞ。

「おいマサト！聞いてるのか！」

「は、ハイイ！！」

長いし正座だから足がしびれて来た。

ぼ、ポツケ村はいつもこういう叱り方なのか？

『ポツケ』のくせに、ユクモより心の在り方が日本人風だなオイ！
確かに俺の知るポツケとは、どこか違った感じだったけど。

「さて、説教もこれくらいにしておこう。何か飲み物を持ってきて
やるから少し待ってる。あ、正座も崩していいからな」

「はい」

ようやくお説教が終わったか……。
父上がいるときはあまり気にする暇が無かったけど、父上の部屋で
てすごいな。

希少なモンスターの素材を使った小物とか、いろんな街からの感謝
状とか。

「やっぱり一流なんだな」父上はっと……なんだ、あれ」

スーツと部屋を見ていた俺だったけど、部屋に置いてあった『ある
物』が視界に入った瞬間、ソレから目が離せなくなった。

「アタツシケース……なんでこの部屋に？」

この世界に全く合わない銀色のアタツシケース。

俺はゆっくりと、引き込まれるように近づいていく。

目の前までくると、ケースの真ん中にロゴが描かれているのに気づ
いた。

「スマート……ブレイン」

どうやら俺の頭はまだまだ使えたらしい。

ロゴの単語を読み取ることができた。

俺の性格上、こういうのは辞書で再確認したいと思うはずなのだが、
今の俺は、自分の言ったことが絶対に正しいという自信があった。

衝動に駆られるように、ゆっくりと手を伸ばしていく。

「ハア・・・ハア」

何故か息遣いまで荒くなってくるが、それが頭の中で響くように聞こえる。

いや、もうそれしか聞こえない。

あと少し・・・あと少し！

指が掛かろうとし・・・

「なーにやってんだマサト」

ビクウツ！！

ギツギツギツ・・・

「ち、父上！！」

い、いつの間に!?!?

・・・そう言う前に、俺は父上の拳骨によって、今日三度目の気絶を味わうことになった。

たっぷり叱られてさらには気絶した後、俺は両親に連れられて、ユクモ村まで足を運んでいた。

理由は言わずもがな、温泉に入る為である。

ここには何度も訪れているが、最初はゲームで見たユクモよりも温泉の数が多くてビックリした。

集会浴場に入ると、通常の集会場とは違った賑やかさがある。

肉体的にも精神的にも（いや、確かに二十歳過ぎだったけどさ）まだまだ子供だった俺は、あまりお酒の臭いがしないここが大好きだった（日本酒っぽい甘い匂いはするけど）。

中に入ってすぐ右にいる番台さん（もちろんアイルーだ）に挨拶&mp;お金を払い、男女別の脱衣場へ入っていく。
3rdじゃ別れてなかったはずだけど、さすがにそうだよな……
って最初は思った。

でも考えてみれば、俺まだ子供じゃん！！

なら堂々とやろう！

ということ、六歳（精神年齢は27）だけど女性側に入るマサトでした。

グヘヘヘ……たっぷり楽しんでやる。

「あらマサト、こっちに来たの?」

「はい。あつちだと、皆にからかわれるので」

嘘ではない。

すでにハンターとしての道を歩み始めた俺は、男どもからすれば格好的だ・・・色々とな。

やれまだまだな〜とか、

やれ俺の子供も見習えっつてんだとか、

やれマサト、お前俺の弟になるか?とか、

最後のやつすごい聞いたことあるんだけど・・・。

「あらマサトくん。こっちにいらっしやいな」

「あ、はい」

女性陣には可愛がられております。

グヘヘ・・・笑みが止まらないぜ。

「アアンもう!そこはダメって言うてるでしょ」

「でも嬉しそうですよ?」

どこを何してるのかは・・・ご想像にお任せします。

「・・・後でウチに来ない?」

「(もちろん行きます!!)・・・まだ子供なんですけど」

本音は出せない、そんな悲しいお年頃。

「ふ〜、やっぱり温泉はいい」

「こつこつとこころはオヤジな俺だけど、しょうがないよね！」

「あつ、マサト〜!!」

両親と離れて一人のんびりとしている俺の耳が、女の子の声を捉えた。

何故って、そりゃ・・・

混浴だからさ!!

「ねえマサトってば！」

おっと、すっかり忘れてた!

自然にこぼれる笑みを少し抑えつつ、声の方に顔を向ける。

バシャバシャとお湯をかき分けて、俺の方に近づいてくる一人の女の子。

「やあ。ティナも来てたのかい？」

もちろん口調は変える。

猫かぶりと言われようと、俺はまだ、完全に馴染めてないみたいだから。

「うん！マサトも家族で来たのね。さっきお父様とお母様に会ったわ」

そう言っただけの隣に座るウェーブのかかった栗毛のボブカットの少女『ティナ・ハールズ』。

俺と同じ年で、同じミナモ村の少女だ。

彼女の両親もハンターで、彼女の母親は昔、俺の母上とコンビを組んで狩りをしていたらしい。

彼女の父親は、父上と同じく別の村からきたみたいだ。

どこの村だったか・・・忘れた。

そんな二人の娘であるティナも、俺と同じようにハンターを目指しているため、既に訓練を始めている俺の姿にやきもきしてるとかないとか。

小さなころからの付き合いだから、何度も遊びに行っているし、実は・・・フフフ、一緒に寝たこともある。

今は流石にタオルを巻いているが、昔はそんなこともなかったから・・・グフフ。

「あゝ、いまいやらしい事考えてたでしょー！」

「い、いやっ！そんなことはないよ！！」

す、鋭いなティナ！

流石に付き合いが長いだけあって侮れん。

ちよつと疑いの目で見てくるティナへの対応に困っていると、再びバシャバシャと音が聞こえてきた。

「ティナ、マサトが困ってるからダメ」

「る、ルー！こんばんは！」

助かった。

ルーのおかげで・・・あ！紹介がまだだった。

このまたまたウェーブのかかった栗毛ロングな少女は、ティナの双子の妹の『ルシール・ハールス』。

俺は『ルー』って呼んでる。

ティナの妹と言っても双子なので、精神年齢に差はない・・・はずなのだが、確実にルーの方が大人びてる。

突っ走りがちなティナをしっかりと押さえてくれるので、一緒にいると安心だ。

彼女もハンターを目指しているが、彼女の方は周囲からもOKサインが出ている。

流石に訓練はしていないが、『すぐにマサトにも追いつくから』と言っていた。

抜かれると俺の立場が無いので、それ以来一層気合いを入れているのだが、その結果が今回のあれだよ！

もちろんルーとも仲がいいし、ティナと三人で同じベットもざらにあるぞ！

それにしても、ティナもルーも美少女の部類に入ってるつくづく思う。

そんな二人が俺の幼馴染って・・・幸せだなあ。

美少女二人を横に侍らせ、自然にお尻を撫でる。

流石にロリコンではないけど・・・そこ！怪しいって言っなー！
と言ってもこの状況じゃ無駄か。

とにかくこの二人、将来は期待できると思う。

ローラさん（二人の母親）もスタイル抜群だし。

このペタンコもいつかは・・・

「マサトのエッチ」

「!?く、口に出てた!?!」

「それもだけど触ってる」

二人が『ジトー』ってこっち見てるよお！

ここはとりあえず・・・

「すみませんでした!?!」

レッツ士下座さ！

お湯の中でだからいつまで息が続くかわからんけ・・・ゴボツ!?!?

「バビブンバブバビボボ！（何すんだ二人とも！）」

二人とも俺の頭を踏みつけてやがる！

ニヤメロン！

俺にそんな趣味は無いぞ！

攻める方が好きなんだぞ？

後でお仕置きするぞ〜・・・息が・・・続かん。

「ガハアツ！！はあああ、死ぬかと思った」

「もうそういうこと言わないって約束する？」

くそっ！性格は全然違つくせに、妙なところで息ピッタリな双子め・・・。

だが俺もひくわけにはいかんだ！！

「それは無理だね！これが僕という男グハアツ！！」

「少し頭冷やしたら？」

「何言ってるんだい！ここは温せゴボゴボ・・・」

あははは・・・人間ってやっぱり浮かぶもんだよね。

顔が下向いてるからこのままじゃ死んじゃうんだけど

「二人とも、もう少し加減というものを覚えたほうがいいと思うんだけどなあ？嫁の貰い手無くなるよ？」

「マサトがもらってくれるんでしょ？」

「私はマサトしかないって思ってる」

・・・え？

まさか俺・・・リア充だったのか!？

俺が呆然としてると、二人は顔を見合わせて笑い出した。

ぬぬぬ・・・冗談だったのか。

少々不機嫌になる俺。

「あ、マサト怒ってる?」

「マサトのそういうところも好き」

「どっちなんだ・・・」

「「ひ・み・つ」「

自分よりも精神的にかなり年下の相手に翻弄されるなんて、俺の精神はかなり体に引つ張られてるようだ。

ま、楽しんでるんだけどさ、悔しいことには変わらない。

ということ腹いせに抱き寄せてお尻をなでなで。

二人も何故か動かないから満足。

・・・今度からもう少しだけ、大人な対応ができるようにしようと思っただ俺だった。

ティナやルーと一緒に上がって、ドリンク屋の特製ドリンクを頂く。もちろん、飲むときは腰に手を当てるのさ!!

「おっ、マサトも上がったのか」
「ティナ達も一緒だったんだな」

脱衣場ののれんの向こう側から、父上と、二人の父のブレアさんが出てくる。

しばらくすると、母上とローラさんも出て来た。
うくん、大人の色気がムンムンと・・・オウツ!?

「痛っ！耳は引っ張ったらすごい痛いんだよ!？」

「「惑わされたらダメ!」「」

そんな必死な顔して引っ張らなくてもいいじゃないか!!
わかったからこれ以上は・・・千切れる!!

「「アラアラ、これなら安心ね」「」

「マサト・・・娘は渡さんぞ!!」

「お前も俺と同じでモテるんだな」はっはっは!!」

そこの四人もふざけてないで助けようぜ!

この後、結局みんなでミナモに帰り、ティナとルーが泊りに来ることになった。

ブレアさんが怖かったけど、ベッドに寝転がればそんなことは吹っ飛んだ。

だが、俺の頭の中の半分は、父上の部屋で見たアタツシユケースの

ことで占められていた。

だから二人の美少女に挟まれていても、俺は少ししか嬉しくなかった。

うん、少しは嬉しかったんだ。

だからイタズラも少しだけやる。

「やっぱり胸は小さい・・・」

「あっ・・・じゃなかったらうるさい！」

それ以来、俺は何度も部屋に入ってアタッシユケースを探したが、結局見つかることはなく、その存在はゆっくりと、俺の頭の中から薄れていったんだよ。

第三話『容易く記憶が戻ると思ったら、大間違いだぞ！』（後書き）

マサトにロリコン疑惑

女だったらなんでもいいのか！
ってか最早ペド

（X）くモチ。それも同年齢だし問題ない

そ、そうだった・・・。
ただのエッチな少年だったこいつ。

第四話 『俺はモンスターを引き寄せる体質なのだろうか』 (前書き)

今回から十歳マサト。

まともなハンター稼業です。

といっても、実は正式なハンターではなく、いまだに訓練生扱いなんですけどね。

この世界で『モンスターを引き寄せる体質』は、人によっては幸、人によっては不幸。

因みに、マサトの場合は不幸。

理由は、彼の思考パターンとそりが合わないから。

それでは、クエストスタート！

第四話 『俺はモンスターを引き寄せる体質なのだろうか』

いろいろあつて10歳になりました。

付近の村で『期待のルーキー』として評判のマサトです。
・・・調子に乗ってすいません。

でもすごいでしょ！

10歳なのにドスジャギイを倒すほどの実力を持つてんだぜ！

それもこれも、厳しい両親と、

「まだまだ踏み込みが甘いぞ！」

「はい！」

「違う！返事は・・・」

「イエッサー！！！」

この教官のおかげだ。

モンハンの定番。

訓練所の教官。

初めて見たときは、『イメージ通りの暑苦しいオッサンだ』とか思ってたよ。

いや、あの時は若かった。

でも今じゃ、『イジリがいがあるけど、尊敬する教官』だ。

なんでイジリがいがあるかって言うと、

「教官！あんなところに村長さんが！！」

「なっ！どこだ！！」

・・・こういう事です。

教官ったらユクモ村の村長さんに気があるみたいで、あの人の前だと真っ赤になっちゃってさ。

お堅い教官のために、訓練中にもこう言ってあげてるんだけど、たまに本当にそこに村長さんがいる時がある。

もし『そうだったら』、その時は皆でお祝いしよう。

と言っても、最初からこんな軽口が叩けたわけでもないんだな。

始めたばかりのころは付いていくのが精一杯で、帰ったらティナやルーにマッサージしてもらわないと、次の日は筋肉が悲鳴を上げて辛かった。いや、マッサージは普通の意味だから！

たしかにその後、二人に『お礼』という名の俺流マッサージをしてあげたけどさ？

だって十歳になって、少しずつ体も変化してきて・・・グフフ。

ハンターとしての『チソ訓練』（なんのネタだっけコレ？でも15

0kmのスピードボールがどうかだったな。こっちは弾丸回避だ(けど)をし始めて数か月。

両親との厳しい訓練という下積みがようやく体に良い影響を及ぼし、段違いの進化を遂げることに成功した。

そして以前俺を困ってくれたであろう溪流のジャギイ&ジャギイノスどもに復讐できるようになったところ、村長さん&教官(顔真つ赤)から、大型モンスター討伐の依頼がきた。

なにが来るかとワクワクしたが、内容は『ドスジャギイの討伐』。

「中型じゃん」

なぐんて言ってしまったがために、追加ノルマで『ジャギイ&ジャギイノス・計20の討伐』までつけられて、ガツカリしながらクエストに向かった。

今回はその時の話について語ろうか。

多分計三話くらいになるから、心して聞いてほしい。

「教官も酷いよな。あんな追加ノルマなんていらねえよ」

馬車っていつかカーグア車？の荷台で揺られながら、誰にも聞こえないように呟く。
普段は基本丁寧だから、クエストの時ぐらいじゃないと元の口調に戻せない。

誰かと一緒のところどころでこんな口調じゃ、いろいろと怪しまれそうだし。

ベースキャンプ

「干し肉よし、塩よし、キノコ・・・嫌いけどよし」

アイテムの準備は大丈夫なので、食料のチェックに力を入れる。

元の世界ではアイテム使いまくりだったが、やはりリアルともなると金がかかる。

その分体をしっかりと鍛えたので、購入するアイテムは回復系が多い。

食料のチェックも終わると、次はプランを練る。

ゲームみたいに走ってれば見つかるのではなく、集団の数を減らしたり、いろんなところに残った形跡を調べたりと、中型以上のモンスターを狩るには手間がかかる。

何故そんなことが言えるのか。そういえば言っていなかったな。

俺は既に中型モンスターを狩ったことがある！

ドスギアノスだ！！

・・・オイ。反応が薄いぞ。
なに？『アイツが一番弱いだろ』だと？

確かに弱かった。

持ち合わせが無いうえにいきなりだったから、支給された大剣で戦ったのだが、ビックリするぐらい簡単だったよ。

でもあいつの面倒なところはそこじゃない。

移動速度が妙に速いところだ。

ゲームよりも行動範囲広し、いっつも駆け回ってるし、逃げ足も異様なほどだし。

普通に追っかけてたら飢え死にしそうだったので、待ち伏せして、貴重な肉を罾肉にしてしかけてやった。

痺れてるところに薙ぎ払いで足を折り（切れ味の鈍さのせいで叩きつけるのと大差ない）、下っ端どもを呼ぶ前に喉を潰し、じっくり料理した。

この世界での狩りは、不便であり便利である。

できたことができないが、できなかったことができる。

振り返りを浴びるのは気持ち悪いが、クエストを達成した時は本当に気持ちいいのだ。

なんだかねだだで順応している。

さて、今のクエストに話を戻そうか。

今回のターゲットであるドスジャギイだが、こいつはドスギアノスの比じゃない。

確かにギアノス系には口から吐く唾液という名の氷結液があるが、そんなものはハンターなら軽く避けれる。

ドスジャギイの恐ろしさ、それはみんながお世話になったあのタックルだ。

よくあるだろう。

他の大型の相手をしている最中に、あいつが割り込んでタックル。ある程度の距離があるのに、それすら無に帰す謎の射程距離。

そして無駄に威力がデカイ。

それさえなければクズなのに・・・。

あいつのタックルの犠牲になったハンターの姿を見たことがあるが、鎧はへこみ、肋骨は肺に突き刺さって胸部から血の泡を吐き・・・。

とにかく一流のハンターでも、食らったら大ダメージは必須。

そんな相手に、今の俺の装備ではかなり危険だ・・・が、俺もわざわざ当たるつもりはない。

この世界での俺は足腰には自信がある。

これもチソ訓練と、両親の地獄の・・・うげえ・・・おかげだ。

素で『回避距離UP』が付いてるようなものだからな。
流石に『回避性能+1』とかは無理だったが。

今の装備は『ハンターシリーズ』に『ユクモの太刀改』

千里珠さえあれば・・・あれさえあれば苦労しないのに・・・。
まあ探知だけでもないよかましたからいいけどさ、あれさえあれば
ペイントボールなんて投げつけなくてもいいんだ。
正直、あれを投げつける瞬間が一番危ない。

どんな状況だろうと、モンスターの注意がこちらに向くことは確実
なのだから。

ドスギアノスの時は使わなかったが、物は試しと同じ雪山のブラン
ゴに使ったときは酷かった。
ジャギイよりも高い攻撃力を持つ奴がこちらを向き、俺がいるとい
う情報は瞬く間に広がっていく。

・・・死ぬかと思った。

「ま、そんな嫌な思い出は放り投げて・・・行きますか！」
まずは足取りを調べんな。

「
」
「
」

「がうう」

「ギャウウウ・・・」

「いくらなんでもさ」

「オオオンオンオン！！」

「やべ仲間呼びやがった・・・じゃない」

「早過ぎんだろおおお！！」

だがとりあえずは、

「コンニャ口食らえ！」

ヒュン！！

パン！

お、当たった当たった。

とりあえずはコイツさえ当てとけばいいから……。

「そんじゃサイナラ！」

戦略的撤退だ！

「はぁ……早いつてあれは」

以前とは違い、ドスジャギイもいる中で撤退することに成功した俺は、奴らのいたエリア6（あの滝のところ）から1に戻り、ガーグア肉を焼きながら作戦を立てている。

やはり1には出てこないようなので、少しでも食料を無駄に使わないように、そこにいたガーグアを狩らせてもらった。

その時卵を落としていったので、そいつは巢まで運んでおいた。

自己満足だが、贖罪のつもりだ。

上手に焼けた肉を食べながら、探知のスキルと地図を用いて奴の位置を確認する。

「8（滝の中）に引っ込んだか……。ダメージを与えたわけじゃないから特に心配じゃないけどな」

だが滝の中ついたら飛竜の巣だ。

それにやつらの巣は俺の隣の2のはずなのに……。

「しかもずっと臨戦態勢ときた。まさか誰かと戦闘中なのか？」

ここは、すこし動いてみるか。

エリア9（吊り橋&洞窟の裏）

さて、わざわざこっちまできたが、あいつまだ戦闘中かよ。

んじゃま、こっそりと覗きにいこうか……。おい、覗きは覗きでも嬉しくない方だからな。

コソコソ

コソコソ

チラくつと

!?

前言撤回だ。

『嬉しいけど、全く嬉しくない状況』だった。

何故って？

そこに女の子がいるからさ

その少女Side

「はあ、はあ、はあ・・・くう・・・」

私が今置かれている状況は最悪です。

大した準備をしないで採取クエストに出かけて、この洞窟でピッケルを振るっていた私の目の前に現れたのが、既に臨戦態勢に入っていたドスジャギイ。

それは既に仲間を引き連れていて、気付いた時には囲まれてました。

でも私だってハンターの端くれ。

ある程度数を減らしたら逃げようと思ってた・・・けど。

数は減ることがなかったの。

いえ、確かに減らしていた。

でも、私が減らすスピードよりも、ドスジャギイが仲間を呼ぶスピードのほうが圧倒的に速い。

気付けば最初よりも数が多くなってて、もう逃げれる状態じゃない。

「パパ・・・ママ・・・」

ごめんなさい。

たった十四年で死んじゃう、娘の親不孝を許して。

「グウウウ・・・」

止めはあなた自身で刺すのね。

もう手も上がらない。

でも武器を構えないなんて、

「そんなの・・・ハンターとして失格じゃないですか!」

私の声と同時に、ドスジャギイが跳びかかって・・・、

「ギヤアアアア・・・ギヤウ!？」

来なかった。
その代り、

「あつぶねっ・・・じゃなかった危なかった。無事かな？」

「え・・・」

私の前には、私よりも小さいのに大きな背中をした男の子がいました。

第四話 『俺はモンスターを引き寄せる体質なのだろうか』 (後書き)

装備はまだ普通のモノを。

でも、探知や千里眼はともかく、『ハンター生活』の地図を常時所持している状態ってなんだ。装備で変わるもんなのかそれは。

マサト自身のスキルは、回避距離UP、肉体強化(実は神様のプレゼント)。体力、攻撃力、防御力アップ)、変態。

作戦や計画は立ててからやるタイプなのに、その体質?故に無駄になるマサト。

突っ走るのは女性相手のみw

今回出て来た少女が三人目。

四歳年上、つまり十四歳です。

こちらはマジのハンター。

詳しいことはまたは次々回に。

あと二話、このドスジャギイ編。

と言っても、決着は次回w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6742x/>

モンスターハンターカイザ～変態転生者の狩猟記～

2011年11月1日02時09分発行